北九州歴史文化遺産　第五十四回

着る、見る者の心揺るがす小倉織
実は江戸期の北九州から

縦じま模様の和風の織物。そう、日本の着物、帯はもちろん今はバッグ、ネクタイ、様々な道具の容器やその包装などとしても愛用されているのが小倉織。古くから日本全国で使われている。だが、その名の通り、実はその織物の起源は江戸時代初期、ここ北九州・小倉の地にあった。２０２２年９月、小倉織が福岡県知事指定特産工芸品に指定された。改めて今、その価値が見直され、人の関心を引きつけている。

北九州市立自然史・歴史博物館の小倉織展示コーナーで行われている石橋勝郎さんによる機織りの実演。

家康も愛用　全国に普及

その特長は、良質で純白の生綿から紡いだ綿糸を２本から４本より合せた強い糸（双糸）で織った大変丈夫、かつ光沢があること。綿織物は江戸時代、全国で生産されていたが、小倉織はその中でも「武士の袴は小倉に限る。擦っても突いても破れず却って光沢を増した」と評されるほど丈夫で長持ちすることで名を知られ、岡山、長野、栃木県などに伝わったという。江戸時代、隠居後の徳川家康が鷹狩りの際、小倉織の袴を着用していたと記す史料、細川忠興が家臣に「小倉縞」とする名の産品調達を命じた記録等もあり、小倉織は少なくとも江戸時代初期には生まれていたと推測される。

江戸中期の天明３年（１７８３）、地理学者として名高い古河古松軒は旅行記「西遊雑記」で「産物に小倉木綿と云うあり、他国にはなき上品の木綿なり」と評価し、他領にも知られる産物になっていたことが分かる。その全盛期は嘉永年間（１８４８～１８５４）前後。小倉城下町と行橋、黒崎など近郊の士族約3000軒の婦女子によって織られ、販路は九州はもちろん、江戸や京阪など全国に広がったとされる。だが、幕末を迎えて政治情勢の混乱に伴い商取引も混乱して生産は激減、衰微した。明治になると手織りから機械織りが普及。書生の袴や学生制服に用いられ、小倉織物株式会社が設立されるなど復活の気運が生じ、行政も支援したが、大正時代、金融恐慌の余波などでさらに衰微を余儀なくされ、昭和初期に途絶えた。

2022年11月から約２ヶ月、小倉城庭園企画展で披露された小倉織

途絶半世紀後復活　新たな発展へ関心高まる

そそんな中、昭和59年（１９８４）、北九州市の染織家築城則子さんが断片を元に小倉織復元に成功した。同市出身で染織研究所で綿織の基本を学んだ後、国内各地でも学び工芸展への出品など経験を積むなかで小倉織断片と出会い、復元に尽力。以後も工芸展への出品、個展などを重ね、小倉織への関心、注目度を高め、愛好者を増やしている。

北九州市立自然史・歴史博物館所蔵の、かつて子ども達がはいていた小倉織袴（はかま）。同館と小倉織協議会が編集・発行の書「小倉織」から転載

これらの動きを受けて平成７年（１９９５）、市民文化講座をきっかけに、小倉織の調査、研究、普及活動を行う豊前小倉織研究会（後、一般社団法人化）が発足した。同研究会は現在、研究会員８人、伝承会員12人で構成。代表大和恵子さん（71）によると、小倉高校の制服が小倉織だった時代があったことを覚えている。「小倉に生まれ、染織に関わっていながら小倉織を全く知らず、平成５年（１９９３）、市民講座で学んだことが現在に至るきっかけだった。糸紡ぎの技術が地元には残っていなかったので愛知県まで習いに行くなどし、少しずつ実態をつかんでいきました。２年後、工房を設けて織り始め、手織りの良さを味わい、今、小学生にも体験してもらっています」と話す。

平成24年（２０１２）には、長年、小倉織の復元や創作を続けてきた作家、研究家による小倉織協議会が発足、同30年（２０１８）、小倉織組合へと引き継がれた。

また、北九州市立自然史・歴史博物館（いのちのたび博物館）では昭和の旧歴史博物館の時代から小倉織の歴史や技術に関する研究を重ねてきており、綿を館の敷地内で栽培し、近年はボランティアによる実演展示も行っている。平成18年（２００６）から機織り機を実演、操作する石橋勝郎さん(79)は「小倉織は布と布の隙間がなく、丈夫でしなやかで温かい。糸の色で織物全体の色になる」とその魅力を説明。同館学芸員上野晶子さんは「一時は幻とさえ言われた郷土の織物が、市民の手で再び守り、伝えられようとしている。経（たて）糸と緯（よこ）糸が織りなす小倉織のように、博物館はこれからも小倉織を担う市民とともに、その研究・普及に努めていきたい」と市民との協調による更なる発展を期している。

シニアスタッフ　村田和夫

今回の歴史文化塾は感染予防のため中止致します。